
アキタラクティブ アイ
Akitaractive Eye

～主体的・対話的で
深い学びのために～

国語編

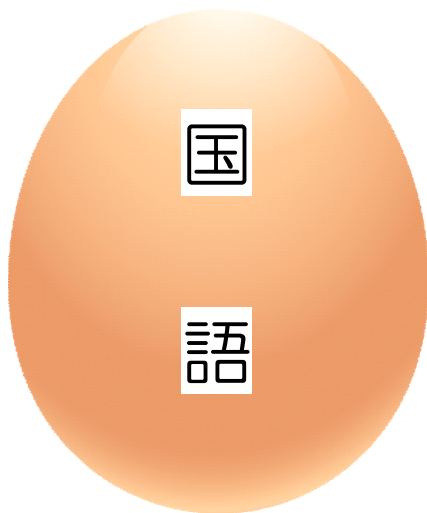


秋田県総合教育センター

2019.10.10

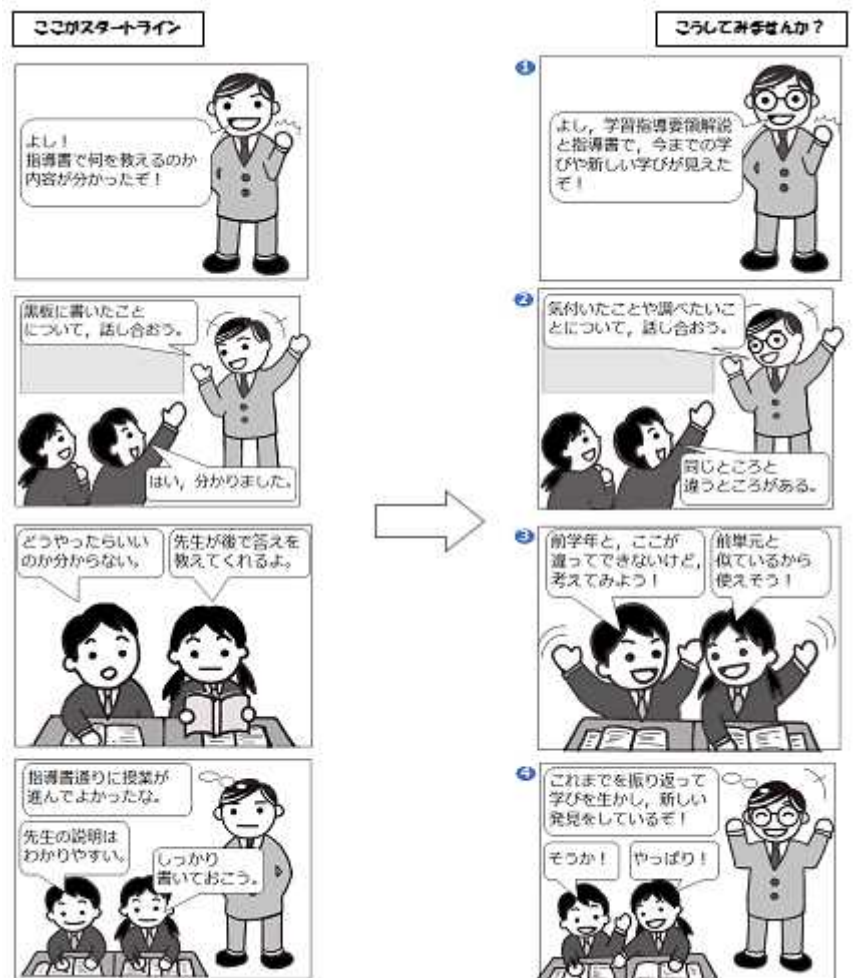
学びの出発

これまでの学びを振り返り、学びの中での気づきを
手掛かりに新たな学びが始まる。



キーワード

「資質・能力」でつなぐ
＋
「言語活動」の工夫
↓
「主体的・対話的で深い学び」



1 わくわく授業をするために

◇資質・能力を焦点化する

国語の授業は言葉を学ぶ時間です。学習のゴールにたどり着いた子どもが、「文章の構成や論理の展開、語句の意味」などについて発見できるよう、身に付けるべき資質・能力を焦点化しておきましょう。

「ありの行列」(光村図書・小3年)
「こういう理由でありは」「読みやすいのは、この段落構成だからか!」
【学習のゴールをどちらに設定すべきだろうか?】

◇入念な教材研究をする

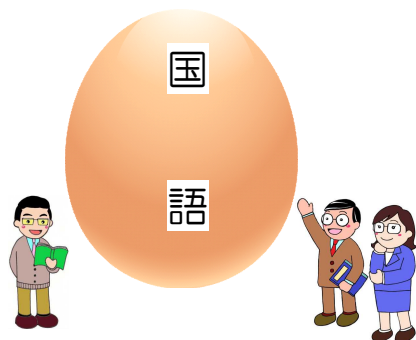
「何のために学ぶのか?」「何ができるようになるのか?」
このことを、子どもが常に意識しながら授業に臨めるよう、教材の目的(教材を通して身に付けるべき資質・能力)を明確にしておくことが大切です。

①「素材研究」
一読者として
素材にふれ、
本質を理解

②「教材研究」
本質を基にした
身に付けるべき
力の発見

③「指導法研究」
身に付けるべき力
の育成に向けた計
画の検討

※(引用)秋田県総合教育センター
特別支援教育のミニマムスタンダード



2 3 学びをつなげるために

◇教科等の特質を踏まえる ◇子どもの声に耳を傾け受け止める

学びをつなげる際は、「内容」をベースにつなげるのではなく、「資質・能力」をベースにつなげましょう。

「どうぶつの赤ちゃん」(光村図書・小1年)
【第1段落に問いがあり、その説明が二つ並ぶ構成】

「問い→答え」という文章の順序に着目すると、大切な部分が見付けられる！

「たんぽぽのちえ」(光村図書・小2年)
【第7段落に問いがあり、以降の段落に説明が並ぶ構成】

「問い→答え」という文章の順序に着目すると、大切な部分が見付けられる！

「すがたをかえる大豆」(光村図書・小3年)
【問いはなく、段落ごとに説明が整理されている構成】

「はじめ・中・終わり」という段落の構成に着目すると、大切な部分が見付けられる！

↓
次の説明文へ

ねらいに示された資質・能力を身に付けることで、見方・考え方が豊かになり、豊かになった見方・考え方を働かせることで、より資質・能力が身に付き、次の学びへとつながっていきます。

4 新たな学びを出発させるために

◇適宜、振り返る場面を設定する

学習の終末だけでなく、他の学習場面でも既習を振り返る場を設定することで、新たな学びが生まれます。

一般的な授業展開

- 1 学習課題を確認する
- 2 自力解決をする
- 3 班で意見交換する
- 4 自分の考えをまとめる
- 5 学習を振り返る

例えば…

学習課題「論の進め方を捉える」との出会い場面で、既習事項【文章構成図の書き方】を振り返ることで、段落のつながりが明確になる。

例えば…

自力解決の前に、既習事項【情景描写に着目して読むこと】を振り返ることで、新たな登場人物像が構築される。

◇課題づくりの場を設定する

子どもが自ら解決に向かう課題が設定できるよう、「なぜ？」「あれっ！」が起きる課題づくりの場を設定しましょう。

素材研究から

「柿食えば鐘が鳴るなり法隆寺」にふれ、疑問に思った点を課題にする。

- ・どこで詠んでいるのだろうか？
- ・この時期の正岡子規の病状は？

→学習課題「句作時の正岡子規の心情を探ろう」

子どもの声から

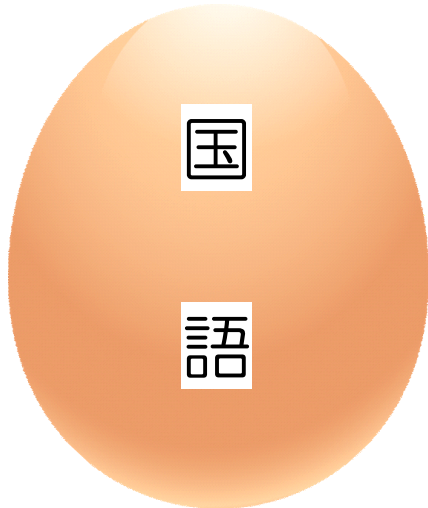
学習を通し子どもが抱いた感想や振り返りに書かれたものを課題にする。

- ・言葉の意味や使われ方を知ると物語のイメージが変わることが分かった。

→学習課題「マイ言葉辞典を作ろう」

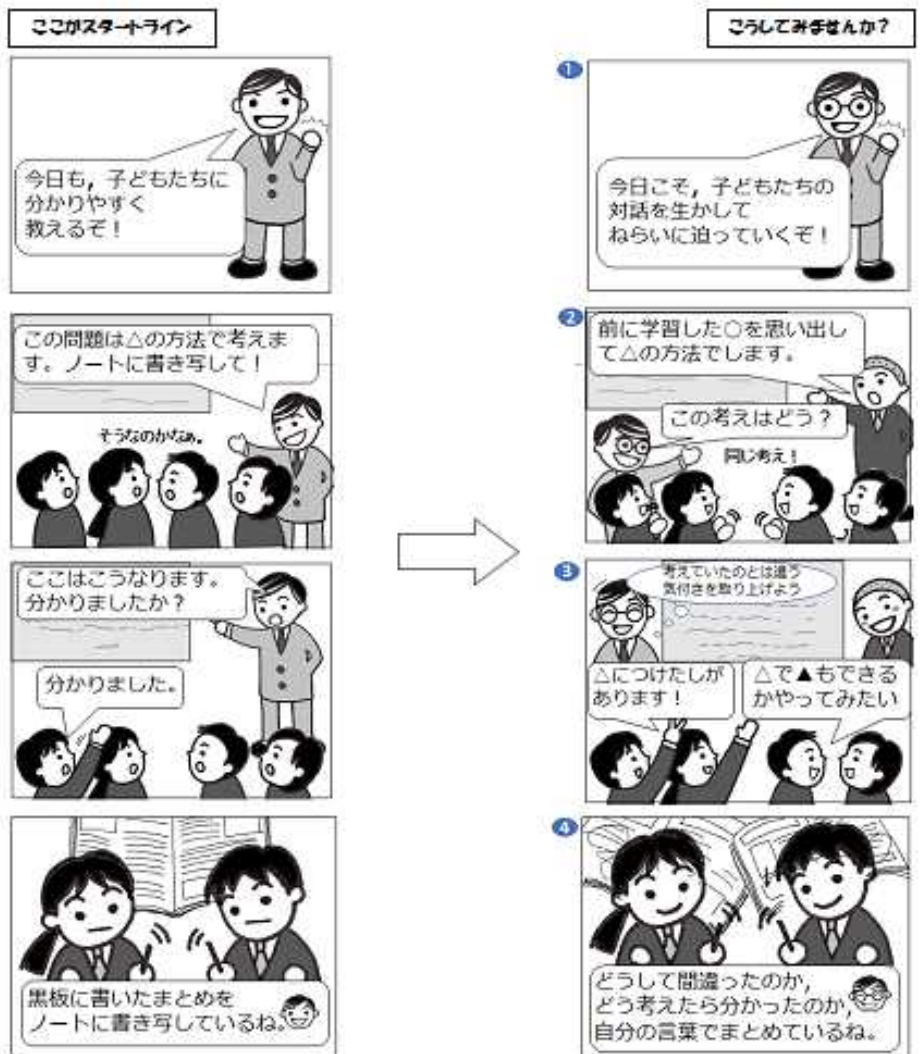
学びの再思考

互いの考えを伝え合い、相手の考えを受け止め、自分の考えを練り直す。



キーワード

「教材研究」と「子どもの実態把握」は授業の両輪



1 ねらいに迫る授業をするために

◇学習活動を吟味する

子どもを学習のゴールへと導く学習活動になっているかどうかについて吟味していきます。

吟味する際の視点の例

【言語活動の工夫】
登場人物への思いを「お手紙」で表すか、「続きづくり」で表すか。

【学習形態】
討論会の練習を少人数グループで行うか、ペアで行うか。

◇効果的な学習支援を考える

学習活動の吟味の際、同時に様々な手立てを考えていくことが、効果的な学習支援へとつながります。

自力解決時の学習支援例

◎既習を生かす！①

各場面の学習
トを参照する

◎既習を生かす！②

ヒントコーナーを
準備する

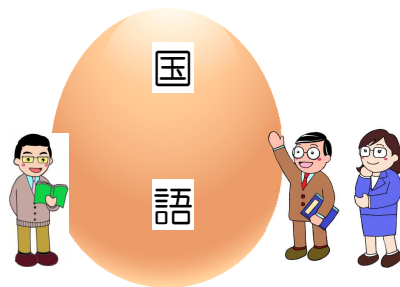
◎書けない！

話型入り学習シートを準備する

◎早くできた！

ミニティーチャ-
をお願いします

なぜスイミーは大きな魚を追いつけたのか？



2

「見方・考え方」が働くようにするために

- 言葉による「見方」 話や文章の内容や表現を、捉えたり考えたり問い直したりするための視点となるもの
- 言葉による「考え方」 話や文章の内容や表現を捉え直し、意味付けをすること

◇これまでの学習を踏まえる

例えば…「前の説明文では筆者の問いが読み取りにつながったから、今回もこの方法で読んでみよう。」と、子どもが考えられる授業構想を。(vol.01 ②③)

◇多様な展開を考える

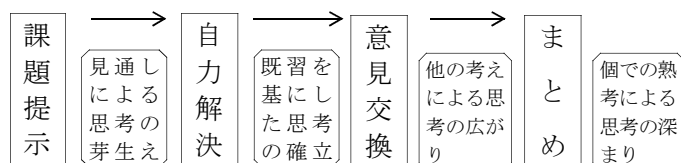
例えば…自ら既習事項を振り返られるように
例えば…意見交流の中で新たな考え方に気付くように
など、活動と場の関連付けを。(vol.01 ④)

3

気付きを生かした展開にするために

◇子どもの思考の流れに沿って展開する

子どもの思考の深まりを軸とした、課題の提示から解決までの活動を構想しましょう。(vol.01 ④)



◇想定外の反応にも柔軟に対応する

めあてに意識は向けつつ、そこへ至るいくつかの道筋を想定しながら活動を構想しましょう。

「しかけカード作り」(光村図書・小2年)
本時のねらい 分かりやすく説明するための工夫を見付けることができる。

着目が想定される工夫① 接続詞で工程の順序を示している。	着目が想定される工夫② 工程を示す挿絵がある。	着目が想定される工夫③ 切り込みの長さが詳しく書かれている。	着目が想定される工夫④ 作成上の注意点を書いている。
---------------------------------	----------------------------	-----------------------------------	-------------------------------

4

問題解決における一連のプロセスを重視するために

◇子どもの試行錯誤を大切にする

子どもの試行錯誤は、「自分の考えとのずれ」によってもたらされます。

例えば… ・これまでの読み方では課題を解決することができない。

・何で友達はこの読みをしたのだろう。

こんな思いを生む課題や活動の設定を。

◇獲得した学びをまとめる場を設定する

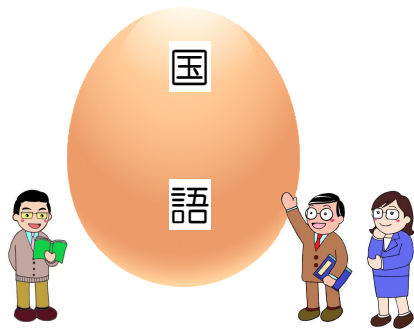
ねらいに示した「身に付けさせたい資質・能力」を、子どもが確認し、次につなげられるよう整理する場が「振り返り」です。

そのために、振り返りで子どもが何を書けばよいのかを、教師が示してあげることが有効です。

例えば… ・前の学習の…を使ったら、～できた。

・〇〇さんの考えから～に気が付いた。

・今回の読み方を次の～で活用したい。



2 学びを見取るために

◇評価方法を検討する

国語における評価方法の多くはシート（ノート）か発言ですが、大切なのはその形式ではなく、ねらいとしているポイントが含まれているかです。

【ねらいと評価の例】

㊦ 段落どうしの結び付きを意識しながら、説得力のある説明のための構成を考えることができる。

㊦ 主張部分と根拠部分の区別、根拠材料の配列等の工夫を取り入れながら、構成を考えている。

◇授業プランを修正する

子どもの学びの状況に合わせ単元及び1単位時間の授業プランを臨機応変に修正していきましょう。

しかし、この修正は本来決まっていた学習活動への軌道修正ではなく、あらかじめ用意していた他のプランへの仕様変更です。

子どもの多様な学びに対応できる各種プランを準備できるかどうかは、事前の深い教材研究にかかっています。(vol.01 ①)

3 学びの実感を促すために

◇子どもの変容を取り上げる

「できるようになった」「別の方法を見つけた」
このような「思い」を、子どもの「自覚的に使える力」へと変換するために、教師が子どもの思いを「価値付け」してあげましょう。

◇フィードバックして働き掛ける

価値付けた学びを、子どもと共有しておきましょう。価値付けられた「見方・考え方」は子どもの新たな「資質・能力」となり「見方・考え方」はより豊かになっていきます。(vol.01 ②③)

教師による価値付け＝「見方・考え方」への褒め
「一文が短くていい文体だね」「上手に比べたね」「前の学習をちゃんと生かしたね」

4 新たな学びを創り出すために

◇学習全体を振り返る場面を設定する

振り返り＝自分の考えを整理する場面
単元の中でバランスをとりながら振り返りを位置付ける

(例)

- ・単元の中盤での振り返り→知識や事実の確認
- ・単元の終盤での振り返り→中盤で確認した知識や事実を関連付け、一般化し構造化した「力」の確認

※(引用)NITS 校内研修シリーズ

新しい学習指導要領において期待される学び 田村 学

◇新たに学びが連続するようにする

前単元で学習したことが、次単元の学習と発展的に、あるいは領域を越えて結びつくように、資質・能力ベースで「系統」を意識していきましょう。
(vol.01 ②③)

※各校種学習指導要領

教科の目標、各学年の目標及び内容の系統表 参照

Akitaractive Eye

～主体的・対話的で深い学びのために～

